

Title	ドゥンシャン方言の音韻変化
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学学報. 59 p.17-p.35
Issue Date	1982-11-08
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80917
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ドゥンシャン方言の音韻変化

角 道 正 佳

Phonological Change of Dunšan Dialect

Masayoshi KAKUDO

Dunšan dialect of the Mongolian language spoken in Kansu province of the Republic of China has undergone interesting phonological changes. The loss of consonants and the addition of vowels made the dialect have only nasal consonants in syllable final positions and the loss of the distinction between front and back rounded vowels caused the breakdown of vowel harmony. There are two aims in this paper. One is to explain the process of the change of the syllable structure and the other is to reconstruct the relative chronological order of the vowel change in terms of labial attraction.

0. はじめに

ドゥンシャン方言というのは、中国の甘肅省臨夏回族自治州の東郷族自治県、和政県、臨夏市に住んでいる約16万人のモンゴル人の話していることばである⁽¹⁾。ドゥンシャン方言の最大の特徴は、開音節志向のことばであるという点である。一般に, homoorganic cluster 以外の子音連続は、ドゥンシャン方言には存在しない。モンゴル文語における子音連続の大部分は、前後のいずれかの子音が脱落する（前の子音が脱落するほうが多い）か、二つの子音の間に母音が割り込むかなどの方法で子音連続が解消されている。語末では子音は *n* と *ŋ* のみが生じ、文語においてそれ以外の子音が対応する場合は、その子音が脱落するか、あるいは、語末に母音が添加されるかして、結果的には開音節になっている。

次に、ドゥンシャン方言の第二の特徴として、母音の数が6つに減っていることがあげられる。モンゴル文語には、母音が7つあるから、一つ減っただけのようにみえるかもしれないけれども、基本的には7つから5つに減り、その過程で新しい母音が1つ生じたと考えられる。その結果、母音調和は崩壊しつつあることになる。モンゴル語の諸方言で母音が減少したものとしては、他にも、バオアン方言やダグール方言があげられる。このうちバオアン方言とドゥンシャン方言は、よく似た減り方をしているのであるが、ダグール方言の母音の減り方は、ドゥンシャン方言とは違った減り方をしている。ごく大ざっぱに言うと、モンゴル文語における *u* と *ü* の区別がなくなり、*o* と *ö* の区別がなくなるとドゥンシャン方言のようになり、*u* と *o* の区別がなくなり、

ü と ö の区別がなくなるとダグール方言のようになる。もっとも、これは非常に都合のいい場合だけについて述べたのであって、実際にはかなり複雑である。かし大きな傾向としては、ドゥンシャン方言は、男性母音と女性母音の区別がなくなっている（すなわち後舌母音と前舌母音の区別がなくなっている）のに対し、ダグール方言では、モンゴル文語の高母音と中母音の区別がなくなっているといえよう。これは、母音推移がどのように生じてきたかということと深い関係をもっていて、ドゥンシャン方言では、前舌母音の後舌母音化だけが起ったのに対し、ダグール方言では、それ以外に後舌母音の低母音化が起ったということを意味するものである。

本稿の目的は以上の二点、すなわち、開音節化及び母音の変化（とくに labial attraction の観点から）の面から、ドゥンシャン方言がどのような経過を経て現在のような姿になったのかを、できるかぎり音韻的に自然な方法で説明しようという点にある。

ドゥンシャン方言に関して利用できる資料は、非常に限られている。主として利用したのは、Todaeva (1961) *Dunšanski yazyk* であり、とりわけこの書物のうしろについている語彙集である。この語彙集には、見出し語1269語が載っていて、ロシア語による語義説明以外に、対応するハルハ方言の形、中国語からの借用論については、中国語の形が書かれている。ハルハ方言の形も中国語の形も書かれていない語が百数十あり、これらの中には、語彙的にはモンゴル語であるが、ハルハ方言に対応する表現のないもの（例えば *kalun tša* 「夏」²⁰ <*qalayun čay*（文字通りには「暑い時」）、チュルク語からの借用語（*tašī* 「石」）やその派生語（*tašitu* 「石の多い」）、などがある。また Todaeva 自身がハルハ方言の対応形があることを見落したか、気付かなかったか、あるいは自明だと思ったのか、ロシア語で意味が記されている以外は何も記されていないもの（例えば、*umba-* 「入浴する」はハルハ方言の *umbax* に十分対応しうる）もある。さらに、語幹は中国語で、造語法はモンゴル語のもの（例えば *gunzola-* 「働く」*gunzo* 「仕事」<工作 *gōngzuò* プラス動詞作成接辞 *la-*）で、何も記されていないものがある。中国語からの借用語には *tša* 「茶」のようにモンゴル語にかなり古くから借用されていると思われる語もちろんある。これらの語は、ドゥンシャン方言自体の歴史的な音韻変化を考慮しなければならない。しかし、比較的最近中国語から借用されたと思われる語が三百以上ある。したがって、検討の対象にできる語は七百に流たない。しかもこれらの語の多くは、生産的な接辞によって作られたものであるから、実際に音韻変化を調べる上で利用できる語はさらに少ないことになる。その結果、平行例を探そうと思っても、いい例が見つからないことがある。例えば、*otšeg.an* 「濃い」は、モンゴル文語 *ödken* に対応する語であるが、*d* と *k* の間に母音が挿入された珍しい例の一つである。一般に子音連続をさけるために母音が挿入されるという例は非常に少ない。そこで、たとえばモンゴル文語の *sedkil* がドゥンシャン方言でどういう形になっているか探しても、これに対応する語は載っていない。対応する語が実際にあるかどうかは、今後の臨地調査を待つしかないであろう。

本稿は、モンゴル文語の形とドゥンシャン方言の形とを比べ、ドゥンシャン方言が歴史的にど

のように変化してきたかを、できるだけ自然な形で説明しようとしたものである。語頭の *p については、もちろんわかっている限り、モンゴル文語より古い形と比べる必要がある。子音の有声化と深い関係があると思われる長母音については今回はあまり詳しく検討しなかった。というのは、ドンシャン方言には、長母音は存在しないから⁴³⁾、古い長母音はすべて短母音になっており、さらにモンゴル文語の γ や g などが脱落した結果生じた長母音さえも短母音になっているからである。(例えば *ayula ula* 「山」) 二重母音らしきものは存在する (*jalayu džalau* 「若い」)。高さアクセント(ピッチ)がどうなっているかは非常に重要な点であるが、アクセントは強さであり、第一音節にあり、最終音節に第二アクセントがあるという再旨の記述がなされているにすぎない⁴⁴⁾。

ここで音韻変化を自然な方法で説明するということの意味を簡単に述べておこう。同じ音韻変化でも、その音韻変化の起こる条件が少なければ少ない程、自然であるといえる。語頭の e が、 m の前だけで脱落するよりは、 m と b の前で脱落するほうがより自然である。すなわち、両唇鼻音の前で脱落するよりは、有声両唇音の前で脱落するほうがより自然であり、さらに一般的に両唇音の前で脱落するほうがいっそう自然であるといえる。古いモンゴル語では p は語頭にしか出現しないから、語頭の e が m と b の前で脱落するということがいえた以上、両唇音の前で脱落するという一般化が可能になるわけである。

Poppe (1951) によれば、モンゴル文語の第二音節の円唇母音の音価を決める鍵はオルドス方言が握っていることになるので、オルドス方言の形も大いに参考にした。

第一章でモンゴル文語の音節構造、ドンシャン方言の音節構造、音節構造の変化について述べ、第二章で主として labial attraction の観点から母音の変化について述べる。

1. 音節構造の変化

1.1. モンゴル文語の音節構造

モンゴル文語の音節構造は比較的簡単である。まず、語頭で子音が連続することはない。次に、語末に現われることのできる子音は、 $l, r, m, n, ng (=ŋ), b, d, g, \gamma, s$ に限られている。これらを C_i と表わすことにする。これら以外の子音は、 $j, \check{c}, \check{s}, t, k, q$ であり、これらを C_j と表わすことにする。語末では、子音が連続することはない。語中では、子音は二つまで続くことができ、その際最初の子音は必ず C_i である。語中の子音連続の二つめの子音は、 C_i のことも C_j のこともあるので単に C と表わすことにすると、語中において、可能な音連続は、 VCV, VC_iCV の二つの型しかないことになる。もちろん、これらの型のすべてが出現するわけではなく、実際には、はるかに少ない組み合わせしか存在しない。ここで大切なのは、可能性はせいぜいこの二つの型しかないという点である。音節の一般型は、以上の事実から、 CV, CVC_i, V, VC_i の四つの型しかなく、このうち V と VC_i は語頭にしか現われない。

C_i と C_j とは、音声学的にどういうクラスを成すのであろうか。 C_i は、シュー音 (hushing

consonant) を除く有声子音及び摩擦音ということになる。j は有声子音ではあるけれどもシュー音であるから C_i からは除外される。q は閉鎖音であってまだ摩擦音になっていないと考えると、s が唯一の摩擦音であることになる。C_j は無声子音及びシュー音ということになる。b, g, γ のうちのあるものは摩擦音になっていたと思われるから、大ざっぱに言うと C_i は C_j よりソノリティーが高い子音といえよう。ただし d と j とでは d のほうがソノリティーは低いものと思われる。この点については、シュー音 (j, č) は常にうしろに母音を伴なうという性質を持っていたというふうに考えることができよう。

1.2. ドンシャン方言の音節構造

ドンシャン方言は、語中に子音が三つ続くのを許さないという点ではモンゴル文語と変わりはないけれども、語中で子音が二つ続く場合、最初の子音は必ず鼻音であるという特徴がある。たとえば niembe-「身をおおう」、tšik, iŋda-「聞く」、antan「金」、antšu「ハンカチ」、ninken「薄い」、mensun「氷」、hanxu「歩み」などである。これらのうち tšik, iŋda-「聞く」は tšiken「耳」からの派生語であると考えられるが、なぜ d の前で n でなく ŋ が出現するのかは、よくわからない。あとは b の前で m が現れる場合があるのを除けば、子音連続の第一番目の子音は n ばかりであることになる。なお b の前だからといって必ず m になるわけでもなく、ganbi「ベン」のように b の前で n が現れるものもある。

ドンシャン方言は、語末で子音が続くのを許さないばかりか、語末に現れる子音は n と ŋ だけであるという特徴を有する。語末には m は出現しないので、モンゴル文語の sam「櫛」は san になる。ŋ で終わっている語には、amaŋ「口」、šidaŋ「歯」、tšik, eŋ「耳」、furuŋ「唇」、nuduŋ「目」、nasuŋ「年齢」、šieŋ「尾」などふしぎに動物に関係があるものが多い。しかし、kuruŋ「麦粉」、boron「灰色の」、džieŋ「衣服」など直接動物に関係ない語も ŋ で終わるものがあるし、逆に、arasun「皮」、yasun「骨」は、動物に関係があるのに n で終わっていることから考えて、ŋ で終わっている語に動物に関係するものが多いのはやはり偶然であるように思われる。語末の子音としては n のほうが圧倒的に多い。

接尾辞が付く場合に母音が挿入されることは、ドンシャン方言を共時的に見た限り殆ど存在しない。わずかに、gien「病気」に対して giemere-「病気になる」という例が存在する。gien はモンゴル文語の gem に対応する語であるから、語末の m が n に変化したものである。一方、giemere- に対応するモンゴル文語は gemte-(gemtū-) という形であって gemre- という形ではない。しかし giemere- は明らかに、モンゴル文語の gem に、-re が添加したものである。その際 m と r の間に母音が挿入され、e が ie に変化して giemere- となったものである。giern と giemere- は音韻変化の結果、共時的には語幹末子音の音価が違っている珍しい例であるといえる。nog, on「緑」、ninken「薄い」、kuitšien「寒い」に -ra あるいは -re が添加する際、語幹末の n が脱落して、nog, ora-「緑の草におおわれる」、nimkere-「薄くなる」、kuitšiere-「冷たくなる」となるし、džotšin「客」に -la が付くとやはり n が落ちて、džotšila-「客として留まる」

とるが、これはドンシャン語固有の現象ではなく、モンゴル文語でもそうであり、また現代の諸方言にも見られる現象である。しかし、džiesum「ロープ」に対して、džiesunla-「ロープでしばる」というのがあり、この場合、モンゴル文語では語幹末の n が落ちるのに、ドンシャン方言では落ちないという違いがある。

共時的には、殆どの場合開音節であるから、モンゴル文語や現代の諸方言に見られるような接辞の異形態は殆ど存在しない。たとえば、モンゴル文語における副動詞 -ju (-jü)/-ču (-čü) の交替は存在しない。モンゴル文語の yabuju「行って」、abču「取って」は、ドンシャン方言では, jabudži, agidži である。共時的な面での異形態は、わずかに母音調和の名残りによる交替が、ごく一部の形態素に見られるにすぎない。たとえば、前述の nog.ora-「緑の草におおわれる」の -ra に対して、nienkere-「薄くなる」の -re がそうである。

1.3. ドンシャン方言の音節構造の変化

音節構造の面では、現在知られているモンゴン語の最古の形は、モンゴル文語と大きくは違ってはいないように思われる。したがってここでは、1.1 に示したような音節構造から、1.2 に示したような音節構造へどのように変化したのであろうかということについて述べることにする。消失あるいは添加される分節音を、母音と子音に分け、語頭、語中、語末（語幹末）と分けると、以下の表において○印を付けたものが存在する⁽⁶⁾。

		母音	子音
語 頭	消 失	○ (1.3.1)	×
	添 加	×	○ (1.3.5)
語 中	消 失	○ (1.3.2)	○ (1.3.6)
	添 加	○ (1.3.3) (動詞に限る)	○ (1.3.7)
語 末 (語幹末)	消 失	×	○ (1.3.8)
	添 加	○ (1.3.4)	×

以下順を追って具体例を見ていくことにする。

1.3.1. 語頭母音消失

モンゴル方言やバオアン方言と違って、ドンシャン方言は、第一音節の母音がよく保存されているけれども、次のように第一音節の母音が消失していると思われるものがあるにはある。

モンゴル文語	ドンシャン方言	
emüs-	muši-	着る
ebüsün	osun	草

最初の例については、第一音節の母音が消失したとほぼ言えるであろうが、二番めの例については、dansun「塩」（モンゴル文語 dabusun）と比べると、第二音節が脱落したと考えるべきかも

しれない。すなわち, ebesün (öbesün) > öbsün > ösun > osun. しかし dansun では b が n として残っているのに osun では b が完全に消失したという理由は説明できない。

1.3.2. 語中母音消失

第二音節の母音が消失したと考えられるものに次のものがある

モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
quruqai	g _u gi	虫
qulayai	g _u g _i	盗み
soloyai	sog _i	左きき
jirüke	džug _e	心臓
quraya	k _u g _a ŋ	仔羊
mölisün	mensun	氷

これらの語は、いったいどのような経過を経て変化したのであろうか。まず、第二音節の母音が消失し、次に子音が消失したのであろうか。そして、第二番めの音節全体が消失したのであろうか。次の例を見ると、音節全体が消失する場合があるようにも思われる。

モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
bayas-qulang	bayasu-lan	喜び
ölös-küleng	oliesu-lan	飢え

bayasulan, oliesulan は, bayasu-, oliesu- という動詞語幹に -lan が付いているとしか考えられないので、モンゴル文語の -qulang, -küleng の q や k が脱落した結果ではありえない。そうすると qu や kü が脱落した結果、ドゥンシャン方言で -lan になっていると考えざるをえないことになるけれども、いったいそのようなことが起こりうるのであろうか。ドゥンシャン方言の -lan は、むしろモンゴル文語の -lang/-leng に対応すると考えたほうがよいように思われる。モンゴル文語の -lang/-leng は qadu-lang 「草刈」、joba-lang 「苦しみ」、jirya-lang 「幸福」など、動詞に付いて名詞を作る働きを持っている。bayas-, ölös- には、-lang/-leng ではなく、qulang/-küleng が付くけれども、この接辞の機能は、-lang/-leng の機能と基本的には同じものである。モンゴル文語にはさらに、amu-yulang 「平穏な」、gemüsi-güleng 「後悔」のように -yulang/-güleng という接辞もあり、この接辞は、-qulang/-küleng と同一の形態素である。ドゥンシャン方言では、これらが中和した。しかも母音調和の交替形も持たない -lan のみが存在することになる⁶⁹⁾。

以上の理由から、bayasulan, oliesulan は通時的に、ある音節全体が脱落した結果ではないことになる。それでは、先の例はいったいどのように説明されるべきなのであろうか。

ここで問題になるのは、開音節志向であるドゥンシャン方言の音韻変化の過程で、なぜ開音節が一旦閉音節になり、また開音節になったのかという点である。もしモンゴル文語より古い段階

では、第二音節の母音は存在しなかったという証拠があれば、ドゥンシャン方言の音韻変化は自然に説明できることになるのであるが、これが本当であるとする、džug₂e の第一音節は、i の折れの結果 u になったと考えることができなくなるから、古いモンゴル語では第一音節は i でなかったことになる。

1.3.3. 語中母音添加

次の語は、語中に母音が添加されたものと考えられる。

モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
amsa-	amusa-	食べてみる
bögle-	bugulie-	栓をする
ödken	otšeg ₂ an	濃い
giskigür	kišig ₂ u	はしご

これらについては、よくわからない点がある。amsa- の m が n になって、ansa- となれば語中에서도許される子音連続となるから、わざわざ m と s の間に母音を添加してまで開音節にするには及ばないし、bögle- も g が脱落すれば、問題はないわけである。実際モンゴル文語の soyta-「酔わせる」はドゥンシャン方言で sodo- に対応するから、音節末の子音が脱落することは十分ありうるのである。子音が脱落するものにさらに、次のような例がある。

モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
mörgu-	mug ₂ u-	祈る、角で突きあう
marta-	mata-	忘れる

ここではっきりといえることは、語中子音が脱落するほうが一般的であるけれども、語中に母音が添加される場合もあるということである。

1.3.4. 語末（語幹末）母音添加

モンゴル文語で動詞語幹が子音で終わっている場合、ドゥンシャン方言では、母音が添加されて開音節になる。

モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
bol-	volu-	になる
tul-	tulu-	頼る
bos-	bosĩ-	立つ
nor-	noru-	湿る
degür-	duru-	満ちる
qolad (a/u)-	g ₂ oloda-	遠くなる
ab-	agi-	取る

ög-	ogi-	与える
bös	bosĩ	綿織物
keyid	kide	家
siγ	tšĩgi	のような

動詞語幹末への母音添加は、例外なく起こっているようである。これは言いかえると, agi- のように子音の音価がbからgへ変化したものもあるにはあるが、動詞語幹末子音は原則として保存されているということを意味するものである。動詞以外ではd, gで終わる語には母音が添加される。

1.3.5. 語頭子音添加

中国語からの借用語のうち、uで始まるものにはvが添加される。

中国語	ドゥンシャン方言	
u (wu)	vu	五
u (wu)	vu	霧
uši (wushi)	vuši	五十

モンゴル文語でuで始まる語のうち、次の語には、vが添加されている⁷⁾。

モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
učira-	votšĩra-	会う
učiraγul-	votšĩrag,a-	会わせる

注意すべきことは、中国語でuで始まっているもので、ドゥンシャン方言でuで始まっている例は存在しないし、また、モンゴル文語でuで始まっている語は、učira- 以外は、ドゥンシャン方言でもuで始まっているということである。以上の事実から、中国語からの借用においてのみは生産的にvが添加されたものと考えることができよう。

もう一つの例としてモンゴル文語のi又はeで始まる語が、ドゥンシャン方言でĩが添加されている語がある。

モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
iniye-	šinie-	笑う
ilegü	šiliu	余り
ičiye-	šĩdže-	恥じる

1.3.6. 語中子音消失

1.3.6.1. 開音節における子音の消失母音間で g, γ が消失する例は、モンゴル諸語に共通の現象であり、ドゥンシャン方言もその例外ではない。g, γ が脱落したあと、母音がそのままの状態で保存されている場合(A)と、長母音化した後、さらに短母音化した場合(B)とがある。

	モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
(A)	niyu-	niu-	隠す
	jalayu	džalau	若い
	sayu-	sau-	すわる
(B)	ayula	ula	山
	nayadu-	nadu-	遊ぶ

Todaeva は、モンゴル文語の nege- に対するドゥンシャン方言の nie-「開ける」を、(A)のグループに入れているけれども、この語は、negē->neē->nē->ne->nie- という変化を辿ったものと考えられるので、(B)のグループに入れるべきである。ne->nie- の変化は、nemür->niembe-「おおう」、ger>gie「家」、köke>kugie「青い」などに見られる e から ie への二重母音化という一般的な現象である。モンゴル文語の nigen に対応するドゥンシャン方言の nie「一」は、g の脱落の結果ではなく、モンゴル文語の negen の ne の部分だけが、上に述べたのと同じ変化をして、nie になったものであろう。

Todaeva は、モンゴル文語の asayu- に対するドゥンシャン方言の asa-「尋ねる」を(B)グループに入れているが、それなら、なぜ、asu- となっていないかが説明できないことになる。しかし、asau- ともなっていないから(A)グループに入れるわけにもいかない。asa-に対応するのは、asay- という形である。したがって、γ が脱落した結果、asa- という形になっているのである。動詞語幹末子音が脱落するのは、この例しかなさそうである。

Todaeva は、モンゴル文語の tabi- に対応するドゥンシャン方言の tai-「置く」を語中子音消失の例にあげている。さらに Todaeva は明示的にはあげていないが、teberi- に対応するのは、tšieru-「抱擁する」であるから、これも b が消失したものである。ところで、tabi- は talbi- という形にさかのぼれるので、ドゥンシャン方言では、talbi->tabi->tai- という変化が起こったのであろうか。そうすると、l が消失したのは、かなり古い時代だと考えざるをえないことになる。

1.3.6.2. 子音連続のうち二つめが消失する場合

語中において rb が連続する場合、b が消失する場合がある。

モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
γurban	g,uran	三
dörben	džieruan	四
arban (<*parban)	haruan	十

džierun「四」、haruan「十」は b が消失したのではなくて、u として残っていると考えるべきかもしれない。あるいは数詞のうちあるものが -uan に統一されたと考えるべきかもしれない、というのは、tavuan「五」は、モンゴル文語で tabun であり、džig,uan「六」はモンゴル文語で jiryuyan であるから、ドゥンシャン語の uan は、モンゴル文語の ban/ben, bun, γuyan という

様々な形に対応するわけである。

1.3.6.3. 音節末の子音の消失

ドゥンシャン方言が開音節の言語になるのに最も広く起こった現象は、音節末の子音が消失したことである。一般にモンゴル文語の C_i のうち、鼻音及び l, d, s 以外は消失する。

モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
bergen	beg.en	女, 息子の妻, 嫁
taryun	tag.un	太った
erte	etšie	早い
qurdan	g.udžin	速い
soyto-	sodo-	酔わせる
oytol-	otolu-	切る
tobči	tīdži	ボタン
kebte-	kidžie-	横になる

l は多くは n になって保存されるのであるが、モンゴル文語の *sayulya* に対応する *saug.a* 「バケツ」は、 l が消失する珍しい例である。また、1.3.2. で述べたモンゴル文語の *qulayai, soloyai* も l が消失する例といえよう。

1.3.7. 語中子音添加

開音節志向のドゥンシャン方言が、わざわざ子音を添加する場合として次の例がある。

モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
nemür-	niembe-	おおう

m と r の間に b が添加されるのは、音声学的には極めて自然な現象である⁽⁸⁾。したがって r の消失は b の添加より遅くなければならない。

1.3.8. 語末子音消失

1.3.6.3. の音節末子音消失と共に語末（語幹末）で起こる非常に一般的な現象である。モンゴル文語の C_i のうち、鼻音及び l, d, s 以外は語末で消失する。ただし動詞語幹末では消失しないほうが普通である。

モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
yar	k.a	手
öndür	undu	高い
bulay	bula	泉
čay	tša	時間

1.4. ま と め

以上をまとめると、次の表ようになる。

音 節 末 子 音		l	r	m	n	g	ɣ	b	d	s
動詞以外	語 中	$\begin{Bmatrix} n \\ \emptyset \end{Bmatrix}$	∅	n	n	∅	∅	∅	dV	sV
	語 末	n	∅	n	n	$\begin{Bmatrix} \emptyset \\ gV \end{Bmatrix}$	∅		dV	sV
動 詞	語 中	∅	∅	mV	n	gV	∅	∅		
	語幹末	lV	$\begin{Bmatrix} rV \\ \emptyset \end{Bmatrix}$	—	—	gV	∅	gV	(tšv) ⁽⁹⁾	sV

— : 該当するものが存在しない

blank: 例が見つからないもの

2. 母音の変化

この章では、母音がどのように変化して今のドンシャン方言のような母音体系になったのかを、主として、labial attraction の面に焦点をあてて、説明しようと思う。先ず2.1でモンゴル文語の母音体系について述べ、2.2でドンシャン方言の母音体系について述べ、2.3で母音の変化について述べる。

2.1. モンゴル文語の母音体系

モンゴル文語の第一音節の母音は、比較的容易に決定できるけれども、第二音節の円唇母音については、すぐには決定できない。o, ö は、第一音節にしか現れないという主張に従うなら、「場所」、「木」は orun, modun と転写されることになる。また「飢える」、「高い」は ölös-, öndür と転写されることになる。Poppe (1951) は、上述の語は oron, modun, ölös-, öndür と転写されるべきであることを主張している⁽¹⁰⁾。その根拠になっているのは、オルドス方言の形であり、第二音節の o の前では、第一音節の o は、オルドス方言でも o であるが、第二音節の u の前では第一音節の o は、オルドス方言では u に変わっているというのがその理由である。同様に、第二音節の ö の前では、第一音節の ö はオルドス方言でも ö であるが、第二音節の ü の前では、第一音節の ö は、オルドス方言では u に変わっている（第二音節の ü も u に変わる）モンゴル文語の oron, ölös- よりさらに古い形は、*oran, *öles- という形であると考えられている。

モンゴル文語	オルドス方言	
oron (<*oran)	oron	場所
modun	mu,du,n	木
ölös- (<*öles-)	ölös-	飢える
öndür	u,ndur	高い

もし Poppe の説が正しいとすると、モンゴン文語の段階ですでにある程度 labial attraction が起こっていたことになる。この事実がドンシャン方言の音韻変化とどのようにかわるのかを、以下の節で述べることにする。

2.2. ドンシャン方言の母音体系（共時的にみた母音調和）

ドンシャン方言の母音は六つあり、次のような体系をしている。

	前 舌	奥 舌	
高	i	ĩ	u
中	e		o
低		a	
	非 円 唇		円 唇

母音が減っているため、共時的な面から言うと、前舌母音と奥舌母音は一語中に共存しうる。また、k₁utog₁o「ナイフ」、k₁ug₁o-「届ける」、kunzo「仕事」のように、u のあとに o がくることがあるというモンゴル文語とは違った大きな特徴がある。さらに、たとえば g₁oloda-「遠くなる」、nog₁ora-「緑の草におおわれる」のように、第一音節の o のあとに a は現れないが、第二音節の o のあとには a は現れる。しかし、sotoro「中」とか ong₁otšo「小舟」のような例もあるので第三音節に o が現れないということはない。

2.3. ドンシャン方言の母音の変化

第一音節の o のあとに、o が現れる例は、男性語には数多く見られるが、女性語には、gogo-「吸う」の一語しかないことを考えると、円唇母音の男女の区別が消失したのは labial attraction よりあとであると考えられる。以下、男性語の labial attraction、女性語の labial attraction について述べる。

2.3.1. 男性語の labial attraction

Poppe の立場に従うと、モンゴル文語で第二音節が o であるものには次のものがある。

(1) モンゴル文語	ドンシャン方言	
ongyoča	ong ₁ otšo	小舟
oro-	oro-	入る
oron	oron	場所
boyoni	bog ₁ oni	低い
boro	boron(ni)	灰色の
noyto	loto	口づな
sonos-	sonosu-	聞く

モンゴル文語で第二音節がoであると考えられる語は、ドゥンシャン方言でもoとして現れる。さらに第三音節のaもoに変わっている。しかし、語幹末に添加された母音uはそのままの形で現れる。

次に、モンゴル文語で第二音節がaの場合について見ることにする。

(2) モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
olan	olon	多い
qola	g,olo(ni)	遠い
soyta-	sodo-	酔わせる

この場合も labial attraction が起こっているといえる。ただし、モンゴル文語 noyan に対するドゥンシャン方言 nojen「官吏」という例外もある。第三音節のaもoに変わることは、次の例からもわかる。

(3) モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
ongyoča	ong,otšo	小舟
dotora	sotoro	中

モンゴル文語の uya にはやはりoが対応する。

(4) モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
doluyan	dolon	七
noyuyan	nog,on	緑の

一般に、第二、第三音節のuはそのままである。

(5) モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
qoyosun	k,osun(ni)	乾いた
noyosun	nog,osun	羊毛

以上の例から、モンゴル文語で第一音節にoがあるとき、第二音節以下がoかaであれば、ドゥンシャン方言ではoとして現れ、第二音節以下がuであれば、ドゥンシャン方言ではuとして現れるといえる。ただし、labial attraction は、iを飛び越えないことが次の例からわかる。

(6) モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
boyoniqan	bog,onig,an	低い(指小辞)
jočila-	džotšila-	客として留まる

次の例から判断すると、labial attraction は、生産的な接辞には起こらないようである。

(7)	モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
	noyuyara-	nog _ɔ ora-	緑の草におおわれる。
	qolad(a/u)-	g _ɔ oloda-	遠くなる

以上の例外と思われるものに次のものがある。

(8)	モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
(A)	soqor	sug _ɔ o	盲の
	toqom	tug _ɔ an	鞍褥
(B)	qoyar	g _ɔ ua	二
	oyira	uira	近い
	qoyina	k _ɔ uina	うしろ
	songgina	sunguna	たまねぎ

(B)については、第二音節の i もしくは y によって、第一音節の o が u に変わったと考えられるが、(A)については、オルドス方言の形が, soxor, doxom であるから, Poppe の説に従うなら例外となってしまう。さらにドゥンシャン方言の tosum 「バター」という語も、オルドス方言の形 Doso~Du_ɔsu_ɔ と比べてみると、モンゴル文語は, tosun なのか toson なのか決定できない。tosun が正しいければ、オルドス方言の Du_ɔsu_ɔ は説明できるけれども、Doso は説明できない。一方, toson が正しいとすると、オルドス方言の Doso は説明できるが, Du_ɔsu_ɔ は説明できないことになる。そもそもオルドス方言の形が二つあるのは何を意味するのであろうか。モンゴル文語の段階で tosun と toson があったのであろうか。たとえこれが正しいとしてもドゥンシャン方言の tosun は説明できない。

第二音節の u の前で第一音節の o が u に変わるという点で、オルドス方言との平行性が見られるものとして次の語がある。

(9)	モンゴル文語	ドゥンシャン方言	オルドス方言	
	modun	mutun	mu _ɔ Du _ɔ n	木
	songyu-	sung _ɔ u-	su _ɔ ŋGu _ɔ -	選ぶ

モンゴル文語の oron は *oran に溯るとされているので、結局は, labial attraction を起こす母音は a であるということになる。したがって、以上の例だけでは、ドゥンシャン方言の祖先において, *oran の a のほうが olan の a よりも先に o に変わっていたという証明はできないことになる。

2.3.2. 女性語の labial attraction

Poppe の説に従うと、モンゴル文語で第二音節が ö であるものには、次のものがある。

(10)	モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
	kökö-	gogo-	吸う
	nökör	noke	同志
	ölös-	oliesu-	飢える
	önöčün	onietšin	孤児 (片親の子)
	mörön	moren	河

gogo-「吸う」以外は、ドゥンシャン方言では第二音節は e もしくは ie であって o ではない。
gogo- だけが例外であるといえる。次にモンゴル文語で第二音節が e の場合を見てみよう。

(11)	モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
(A)	ödken	otšeg,an	濃い
(B)	bögle-	bugulie-	栓をする
	köke	kugie	青い
	öngge	ungie	顔
(C)	öndegen	endeg,i	卵
	dörben	džiecuān	四

ドゥンシャン方言では、第一音節の母音が, o, u, e, ie とさまざまな音に対応するし、第二音節も e, ie, a, ua とさまざまな音に対応しているが、共通していえることは、第二音節に o が現れることはないという点である。第一音節が o となっているのはどういう場合であろうか。otšeg,an「濃い」は、第二音節に母音が添加されたこととは無関係ではないと思われる。モンゴル文語の kökō-「吸う」、nökör「同志」と köke「青い」、öngge「色」(顔)とで、ドゥンシャン方言の第一音節の母音が違うことから、ドゥンシャン方言の祖先には、少なくともある語については、第二音節の e が ö になっていた時代があることが推定される。(C)については、どのような条件で ö が e 又は ie になるのかわからない。

第二音節に üge があるものとして次のものがある。

(12)	モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
	örügel	olienī	一對の片方

この語はモンゴル文語の r がドゥンシャン方言 l に対応している変わった例である。

第二音節以下にある ü も o にはならない。

(13)	モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
	kölüsün	kuliesun	汗
	kölüre-	kulieru-	汗をかく
	mörgü-	mug,u-	祈る, 角で突きあう。

öndür	undu	高い
ömükei	fumug.i	悪臭を払つ

もちろん i を飛び越えて, labial attraction が起こっている例も存在しない。

(14) モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
mölisün	mensun	氷
könjilen	guandželie	毛布

語中, 語末に添加された母音にも labial attraction は及ばない。

(15) モンゴル文語	ドゥンシャン方言	
bös	bosī	綿織物
bögle-	bugulie-	栓をする

2.3.3. 母音の変化のまとめ

(1) と (10) から, モンゴル文語以前に起こった変化として, 次のようなものがあったであろうと思われる。

$$\textcircled{1} \quad \begin{bmatrix} a \\ e \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} o \\ ö \end{bmatrix} / \# C_0 \begin{bmatrix} o \\ ö \end{bmatrix} C_1 _$$

すなわち, 第一音節の o, ö のあとにある a, e はそれぞれ o, ö に変わる。ただしこの変化は, ある特定の語彙にのみ起こったものである。男性語においては, (2), (3)からわかるようにドゥンシャン方言では, 第二音節以下の a は(6)のように i を飛び越えたり, (7)のように生産的な接辞でない限り, o のあとで o に変わる, いわゆる labial attraction が起こる。

$$\textcircled{2} \quad a \rightarrow o / o C_1 _$$

labial attraction とは一応別に(4)にみられるような変化が起こる。

$$\textcircled{3a} \quad uyā > u'ā > \bar{o} > o$$

②に対応する女性語の labial attraction は実際には起こらなかったであろうと思われる。というのは, (10)と(11)(13)とを区別するのは, 第二音節の母音であると考えられるから, もし女性語に labial attraction が起こったとしたら, (10)と(11)(13)とは区別できないことになる。

(4)と平行するのは(12)である。すなわち

$$\textcircled{3b} \quad ügē > ü'e > \bar{ö} > ö$$

(12)の第一音節が, ドゥンシャン方言で o であるのは, (10)の第一音節がドゥンシャン方言で o であるのと同じ理由によるものと考えられる。すなわち, 第二音節がある時代に ö (あるいは ð) であったからこそ, (11)(B)や(13)のように, 第一音節が u になっていないのである。

男性語では(8)(B)のように、第二音節に y もしくは 子音 + i を持っている語の第一音節の o は u に変わる。

$$\textcircled{4}a \quad o \rightarrow u / \# C_0 _ \left\{ \begin{array}{c} y \\ C_i i \end{array} \right\}$$

女性語でこれに対応するのは(11)(B)であろう。すなわち、第二第節の e の前の ö は ü に変わる。

$$\textcircled{4}b \quad \ddot{o} \rightarrow \ddot{u} / \# C_0 _ C_i e$$

オルドス方言に起こったのと同じ変化が (9) 及び(13)に見られる変化である。すなわち、u の前の o は u に変わり、ü の前の ö は ü に変わる。

$$\textcircled{5}a \quad o \rightarrow u / \# C_0 _ C_i u$$

$$\textcircled{5}b \quad \ddot{o} \rightarrow \ddot{u} / \# C_0 _ C_i \ddot{u}$$

女性語の第二音節以下にある ö (すなわち①及び③bで生じた ö) はすべて e あるいは ie になる。ドンシャン方言では、モンゴル文語の e 自体が、ある場合に ie に対応しているから、変化としては、第二音節の ö は一旦 e になり、その後あるものがさらに ie に変わったと考えられる。

$$\textcircled{6} \quad \ddot{o} \rightarrow e / \ddot{o} C_i _$$

$$\textcircled{7} \quad e \rightarrow ie / \dots \quad \text{条件は不明}$$

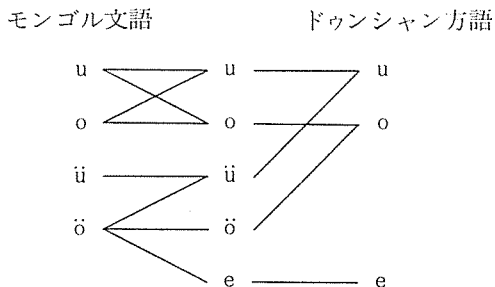
ドンシャン方言では、ü は u と、ö は o と融合してしまう。すなわち

$$\textcircled{8} \quad \ddot{u} \rightarrow u$$

$$\ddot{o} \rightarrow o$$

男性語の第二音節以下の o が e や ie になっているものは存在しないから、⑧の変化は、⑥よりはあとで起こったと考えられる。しかし⑦と⑧の二つのうち、どちらが先に起こったかは、わからない。一般にどの変化がいつ頃起こったかはわからないけれども、相対的には③a と③b の長母音化までは、④b, ⑤a, ⑤b よりは早く起こっていたであろうと思われる。なぜなら、もし逆の順で変化が起こったとすると、たとえば「七」は *dolon* ではなく *dulon*, 「一對の片方」は *olieni* ではなく *ulieni* となっているはずであるからである。

第一音節の円唇母音の対応を図示すると次のようになる。



〔注〕

- (1) 村松 (1973 : 82) による。
- (2) ドゥンシャン語の表記は, Todaeva (1959) で採用されているものを用いた。
- (3) 長母音を記してあるものは, xō「怒り」, kṁ「しめる」などのごく少数の語に限られている。
- (4) Kaschewsky (1969: 261) には 'dawala「胆のう」, dawa'la「気泡」というアクセントによる最小対立の例が載っているが, Todaeva (1961) にはこれらの語は載っていない。
- (5) čai「茶」, noyir「眠り」は, ドゥンシャン方言では tša, no であるから, 子音だけでなくある種の母音が語末で脱落しているものがある。
- (6) モンゴル文語にみられる異形態が, ドゥンシャン方言で中和した例としてさらに使役の接辞があげられる。

モンゴル文語		ドゥンシャン方言
-lγa -/-lge -	}	-g,a-
-γa -/-ge -		
-γul -/-göl -		

なお, 小沢 (昭和54年 : 208-220) を参照。

- (7) 語頭に v が添加される例としてさらに, モンゴル文語 egüden, ドゥンシャン方言 vidzien「戸」というのがある。
- (8) ラテン語の camera からフランス語の chambre の変化などに見られる。
- (9) ドゥンシャン方言の etši-「行く」に対応するモンゴル文語は, eči-(oči-) であると思われるが, od- がより古い形であるとするれば, 語幹末の d のあとに母音が付加されたのが eči- であるということになる。なお, Poppe (1955: 30, 110, 113) を参照。
- (10) この反論としては, Thomsen (1959) がある。

参 考 文 献

- 服部四郎 (昭和21年)『蒙古字入門』文書局印行
- Hattori, Shirô (1972) 'Initial Plosives of Proto-Mongolian and Their Later Developments—With Two Additional Remarks—', 『言語の科学』第3号, 63-92.
- Kaschewsky, Rudolf (1969) 'Neuere chinesische Aufsätze zur Zentralasienkunde III (mit einem Glossar chinesischer linguistischer Termini)', *Zentralasiatische Studien des Seminars für Sprach- und Kulturwissenschaft Zentralasiens der Universität Bonn* 3, 257-287.
- 村松一弥 (1973)『中国の少数民族—その歴史と文化および現況—』毎日新聞社
- 野村正良 (1979)『原蒙古語の母音体系に就いての研究—蒙古語比較音韻論研究—』采華書林
- Nomura, Masayoshi (1950) 'Remarks on the Diphthong [wo] in the Kharachin Dialect of the Mongol Language,' 『言語研究』第10号, 126-142
- 小沢重男 (昭和43年)『古代日本語と中世モンゴル語—その若干の単語の一比較研究』風間書房
- 小沢重男 (昭和54年)『中世蒙古語諸形態の研究』開明書院
- Poppe, Nicholas (1951) 'Remarks on the Vocalism of the Second Syllable in Mongolian,' *HJAS* Vol. 14, 1-2, 189-207.
- Poppe, Nicholas (1955) *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki.
- Poppe, Nikolaus (1960) *Vergleichende Grammatik der Altaischen Sprachen Teil 1 Vergleichende Lautlehre*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Poppe, Nicholas (1964) *Grammar of Written Mongolian*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

- Poppe, Nikolaus (1971) 'Über einige Besonderheiten des Tsongol-Dialektes,' *Zentralasiatische Studien des Tsongol-Dialektes*, *Zentralasiatische Studien des Seminars für Sprach- und Kulturwissenschaft Zentralasiens der Universität Bonn* 5, 145-155.
- Todaeva, B. H. (布·哈·括达娃) (1957) 「研究中国各蒙古語和方言的初步总结」『中國語文』总第63期, 32-40. (李佩娟譯)
- Todaeva, B. H. (1959) 'Über die Sprache der Tung-hsiang,' *Acta Orientalia Hungaricae* 9, 273-310.
- Тодаева, Б. Х. (1960) *Монгольские языки и диалекты Китая*, Издательство восточной литературы, Москва.
- Тодаева, Б. Х. (1961) *Дунсянски-язык*, Академия наук СССР, Институт народов азии, Издательство восточной литературы, Москва.
- Тодаева, Б. Х. (1946) *Баоаньский язык*, Академия наук СССР, Институт народов азии, Издательство «Наука», Москва.
- Тодаева, Б. Х. (1973) *Монгорский язык*, Академия наук СССР, Институт востоковедения, Издательство «Наука» главная редакция восточной литературы, Москва.
- Thomsen, K. (1959) 'Bemerkungen über das mongolische Vokalsystem der zweiten Silbe,' *Acta Orientalia* (AcOr) Vol. 24, 1-4.

(1982年6月17日)